

3 遺構

(1) 調査前の地形と基本層序

調査前、経蔵と鐘楼には土壇が残っており、地表に礎石の上面が露出していた。中室大房（以下、中室と略す場合がある）には土壇はなかったが、北半では同様に礎石の上面が地表に露出していた。

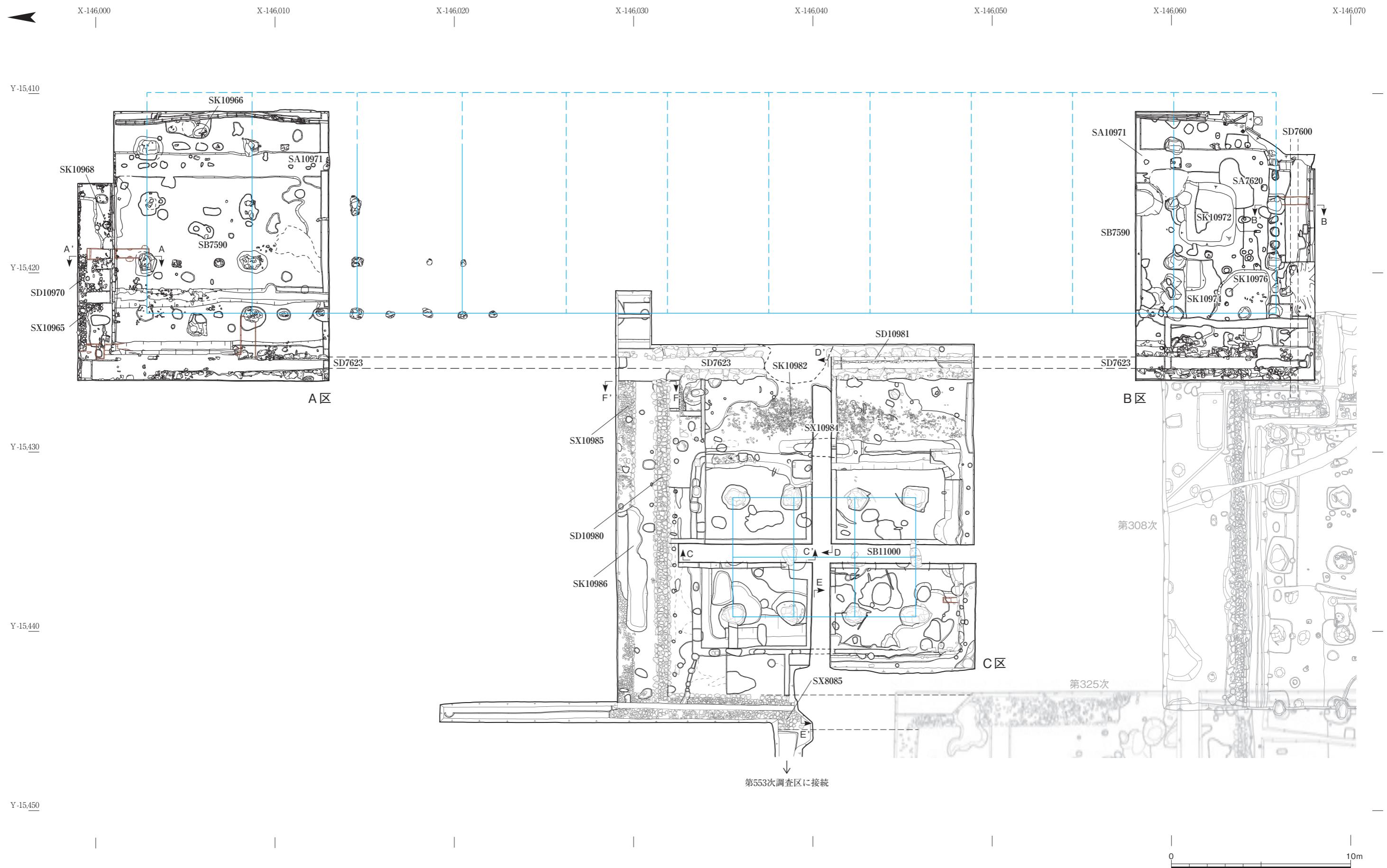
基本層序は、以下のとおりである。中室（A・B区）は、表土および近代以降の造成土が40cm程度あり、その直下が黄褐色粘質土（基壇積土）もしくは黄褐色砂礫土（基盤層）となる。遺構検出は、近代以降の造成土を除去した面でおこなった。検出面の標高は、基壇上面がA区で95.3m、B区で95.4m、基壇の北方が95.2m、西方が95.4mである。

経蔵（C区）は、土壇部分は表土および近代以降の造成土が約10cmあり、その直下が基壇土である。基壇は黄褐色砂礫土の基盤層を削り出した上に土を積んで造られており、黄橙色粘質土（創建当初の積土）の上に、部分的に明黄褐色粘質土（中・近世の積土）を確認した。遺構は近代以降の造成土を除去した面で検出し、基壇西北部では明黄褐色粘質土を掘り下げ、黄橙色粘質土上面でも検出をおこなった。土壇の周囲では、表土および近代以降の造成土が40～65cmあり、その下に近世以前の整地土を複数層確認した。その中には、焼土層が2層あった（以下、上層焼土・下層焼土と呼ぶ）。遺構検出は、近代以降の造成土を除去した面でおこない、基壇の北方と西方については、さらに上層焼土上面、下層焼土上面、基盤層上面でもおこなった。標高は、基壇土上面が96.1m、基壇周囲の近代以降の造成土を除去した面および上層焼土上面が95.5m、下層焼土上面が95.35m、基盤層上面が95.3mである。

鐘楼（D・E区）は、土壇部分は上から表土（5～10cm）、近代以降の造成土（35～50cm）、黄褐色砂礫土（基盤層）となる。遺構は黄褐色砂礫土の上面で検出した。土壇の周囲では、近代以降の造成土と黄褐色砂礫土（基盤層）との間に整地土を複数層確認した。その中には焼土層が2層あり、主に各焼土層の上面および基盤層上面で遺構を検出した。標高は、基壇土上面が95.6m、上層焼土上面が95.4m、下層焼土上面および基盤層上面が95.3mである。

(2) 中室（A・B区）の遺構

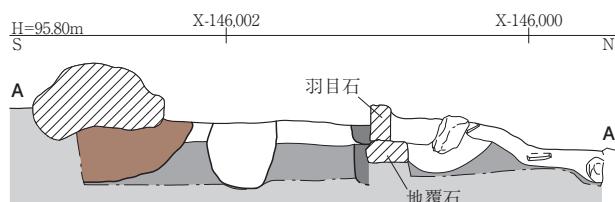
中室大房SB7590 長大な南北棟礎石建物で、桁行11間、梁行4間と推定されるが、詳細は後述する。今回の調査では、北端の桁行1間、梁行3間分（A区）と南端の桁行1間、梁行3間分（B区）について、礎石およびその据付穴や抜取穴を確認した。東の側柱と基壇縁は、現在の参道にあたるため調査できなかった。礎石は長径1m前後の安山岩で、計11基を検出した。いずれも柱座などの造り出しあはない。桁行の各柱間には、長径約50cmの小型の礎石を2基ずつ配置する。南側柱筋（B区）では、各柱間に長径45～50cmの小型の石を3基ずつ配置しており、この上に木製の地覆を置いたと考えられる。このような地覆を受ける石は、西面と北面の側柱筋では確認できなかった。残存する礎石には動かされた痕跡がなく、ほとんどが創建当初の位置を保っているとみられる。建物規模は、桁行総長が約62.8m（213尺、基準尺はこれまでの調査成果に倣い1尺=0.295mとする）、柱間寸法は北端の1間が約5.9m（20尺）、南端の1間が約5.6m（19尺）。梁行は11.3m以上で、柱間寸法は西から約3.0m（10尺）、約3.2m（11尺）、約3.2m（11尺）である。桁行に配置される小型礎石の柱間寸法は、A区が各柱間の北から約1.8m（6尺）、約2.3m（8尺）、約1.8m（6尺）、B区が南から約1.8m（6尺）で他は不明である。



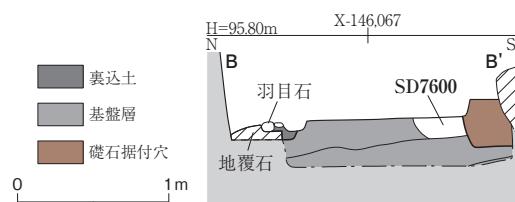
第3図 中室調査区（A・B区）・経蔵調査区（C区）遺構平面図 1:200

基 壇 基壇は、基盤層を削り出して造られており、A区ではその上に黄褐色粘質土の積土を確認した。基壇の規模は、南北が約66.7m（226尺）、東西が13.5m以上で、東はさらに調査区外に延びる。基壇の出は、北面と南面がそれぞれ約2.0m（6.5尺）、西面が約2.1m（7尺）、東面は不明。残存する基壇高は、北端で約30cm、南端で約25cmである。

基壇外装は、基壇の北面と南面で地覆石と羽目石を、西面北端で地覆石を確認した。北面では、基壇西北隅から東に約9.4m分、地覆石7石と羽目石10石を検出した。遺存状態は非常に良く、羽目石は上端の当初加工面まで残存していた。西面では、基壇西北隅から南に約7.0m分、地覆石7石を確認した。西北隅は直角には収まらず、西面の地覆石が北面の地覆石より約10cm北に突き出している。さらにその北延長上にも地覆石の抜取溝があることから、北面の地覆石とT字状に接続していた時期があったとみられる。南面では、断続的ながら東西約10.3m分、地覆石8石を検出した。南面西端は後述する南北溝SD7623に壊されており、西南隅の状況はあきらかでない。地覆石内側（基壇側）の切り欠き部分には、羽目石の下端が帶状に遺存している箇所も認められた。地覆石は完存するもので長さ約95cm、幅約30cm、高さ約20cm、羽目石は長さ約95cm、幅約15cm、高さ約25cmを測る。大きさは均一で、互いに仕口を施して組み合わせる。これらの外装は、二上山産の凝灰岩を用いていることや、



第4図 中室北端（A区）土層図 1：50



第5図 中室南端（B区）土層図 1：50



第6図 中室北面の基壇外装（A区、西から）



第7図 中室南面の基壇外装（B区、東から）

裏込土が精良で炭化物や遺物が混じらないことから、創建期のものである可能性が高い。後世に据え替えられたものだとしても、据付痕跡に重複がみられないことから、創建時の位置を踏襲していると考えられる。

石組溝SD7623 中室の西辺に沿って北流する石組溝。A・B・C区にまたがって検出した。幅約65cm、深さ約35cm。側石には、片麻岩を主体とする長径約80cmの自然石を用いる。1999年度の第308次調査でも検出しており、その成果をあわせると、総延長は約70mになる。A区北端で北室（北僧房）に突きあたり、西に折れる。第308次調査では享保2年（1717）の焼失後に築造されたものと理解していたが（『概報Ⅱ』、2000）、側石に風化面で割った石をそのまま用いていることや、室町時代の『春日社寺曼荼羅』に描かれていることなどから、中世の築造とみて差し支えない。埋土に含まれる遺物の年代観から、明治時代以後に廃絶したと考えられる。興福寺境内の主要な排水路の一つとみられ、中室と併存している時期は、その西面の雨落溝としても機能していた可能性がある。なお、中室西面の古代の雨落溝は、A・B区では確認できなかったが、C区で検出したSD10981（後述）がそれに該当する可能性がある。

石組溝SD10970 A区北端、中室の北方で検出した東西方向の石組溝。幅40cm以上、深さ約10cmで、約6m分を検出した。側石と底石には径15cm程度の玉石を用いる。北室南面の古代の雨落溝と考えられる。

玉石敷SX10965 SD10970の南に接する東西方向の石敷。拳大の石を敷き詰め、南側に長径20cm程度の見切りの石をならべる。幅は約75cm。長さ約3m分を検出した。なお、見切石の南に接する位置で、東西方向の凝灰岩列およびその抜取溝を検出したが、時期および性格は不明である。

土坑SK10968 A区北端、中室の北面基壇に接して検出した不整形の土坑。東西2.4m以上、南北0.5m以上、深さ約30cm。埋土に多量の瓦を含む。底部付近からほぼ完形の瓦質火鉢が出土した（第8図）。

土坑SK10966 A区の基壇上面で検出した土坑。平面は長径約90cmの楕円形を呈する。深さは約30cm。埋土に多量の炭・焼土を含む（第9図）。13世紀中頃～後半の土器が出土している。

東西溝SD7600 B区南端で検出した素掘溝。幅約30cm、深さ約15cm。第308次調査で検出した東西方向の素掘溝の延長部分にあたる。これまでに検出した総長は23.6mで、東はさらに調査区外に延びる。中室の礎石据付穴と重複し、それより古い。三条条間南小路北側溝の可能性が指摘されている（『概報Ⅱ』、2000）。

築地塀SA7620・SA10971 SA7620は、第308次調査で検出した東西方向の築地塀。明治21年（1891）



第8図 土坑SK10968瓦質火鉢出土状況（A区、北から）



第9図 土坑SK10966（A区、北から）

ごろ、奈良公園における興福寺の寺地が定められた際に設けられたものである。今回その東延長部がB区で北に折れ、A区を越えてさらに北に続くことを確認した。南北方向の築地塹をSA10971とする。SA7620の東延長部は約9.5m分検出し、第308次調査とあわせると、長さは14.7mとなる。SA10971はB区で約4.4m分、A区で約12m分を検出し、確認した総延長は64.4mとなる。いずれも両縁に大石を積んだ基底部と瓦の詰まった積土を検出した。基底部の幅は0.9m前後、掘方の幅は1.4m前後である。

その他 他にB区の基壇上面において、近世～近代の廃棄土坑を複数検出した（SK10972、SK10974、SK10976など）。いずれも埋土に多量の瓦を含む。

（3）経蔵（C区）の遺構

経蔵SB11000 桁行3間、梁行2間の南北棟礎石建物。礎石11基のほか、礎石の据付穴や抜取穴を検出した。礎石は長径1.0～1.6mの安山岩で、柱座などの造り出しあはない。残存する礎石は、一部動かされているものもあるが、多くが創建当初の位置を保っているとみられる。建物規模は、桁行総長約10.0m（34尺）、柱間寸法は中央間が約3.5m（12尺）で、両脇間は各々約3.2m（11尺）。梁行総長は約6.5m（22尺）で、柱間寸法は約3.2m（11尺）等間である。

基 壇 現存する基壇の規模は、南北約14.5m、東西約10.5m、高さ約75cm。基壇の出は、四周いずれも約2.2m（7.5尺）である。基壇は、黄褐色砂礫土の基盤層を削り出した上に土を円丘状に積んでいる。版築は確認していない。

基壇外装は、西南部と東北隅で羽目石の一部を確認した。地覆石はなく直接羽目石を立てており、裏込土に含まれる遺物の年代観から、室町時代以降に据え付けたものとみられる（第11図）。そのほかは、近代の抜取溝が残るのみである。しかしながら、古代の外装の痕跡が確認できなかつたことは、創建時の位置を踏襲して再建が繰り返されたことを示すと考えられる。また、基壇北面の外装抜取溝と石組溝SD10980（後述）との間では、下層焼土の直下で、径1～3cmの礫を敷いた小砂利敷を検出した。雨落溝は検出されず、小砂利敷に雨垂れの痕跡が見られたことから、雨落溝はともなわないと考えられる。基壇の東面では、近世の階段の可能性がある高まりSX10984を確認した。東西約1.1m、南北約4.2m、高さは約20cmを測る。東面中央部分で断面調査をおこなったが、中世以前の階段は判



第10図 築地塹SA7620（奥）と築地塹SA10971（手前）（B区、北から）

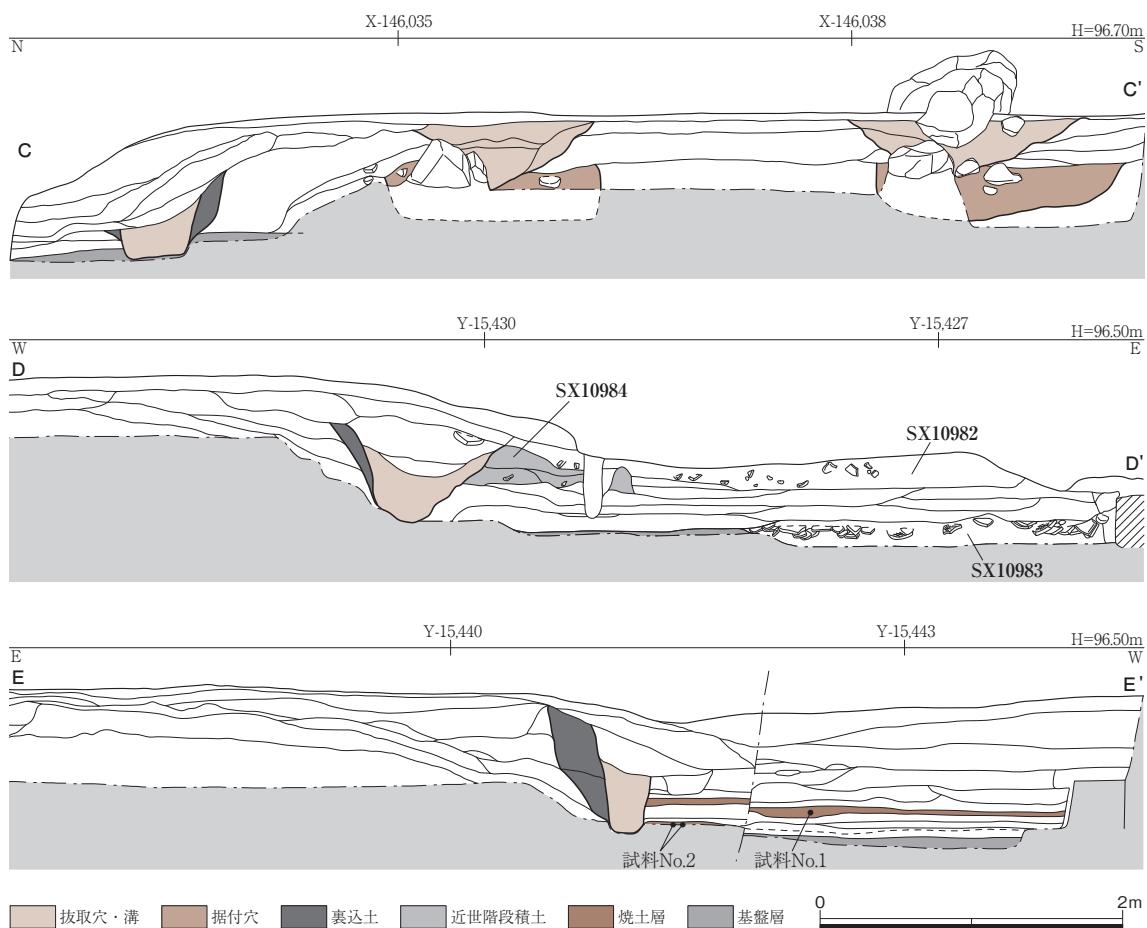


第11図 経蔵SB11000西南部の基壇外装と抜取溝（C区、南西から）

然としなかった。他に、基壇の北・西・南で建設時もしくは解体時の足場穴とみられる小穴列を検出している。小穴は平面が径20～25cmの円形を呈する。上層焼土の上から掘り込まれるが、詳しい時期は不明である。

瓦溜SX10982 基壇の東面に沿って、東西約2m、南北約12mの範囲に帶状に広がる（第13図）。瓦の年代は近世が主体で、享保2年（1717）の火災後の片付けにともなって廃棄されたものと考えられる。

瓦溜SX10983 基壇の東面、瓦溜SX10982の下層で検出した。上層の瓦溜SX10982を一部掘り下げ、



第12図 経蔵（C区）土層図 1:50



第13図 瓦溜SX10982（C区、北東から）



第14図 瓦溜SX10983（C区、南から）

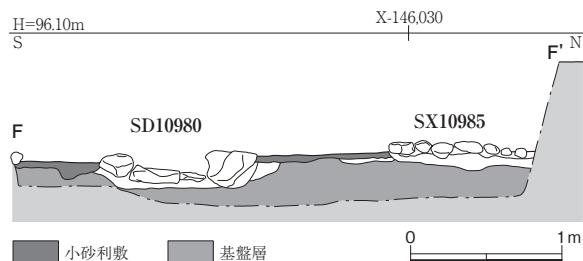
東西2.0m以上、南北2.6m以上の範囲に広がることを確認した（第14図）。奈良時代の瓦が主体で、古代の焼失とともに瓦溜であろう。

石組溝SD10980 経蔵の北方で検出した東西方向の石組溝。側石と底石に径25cm程度の玉石を用いている。幅約50cm、深さ約10cmで、

長さ約19m分を検出した。西はさらに調査区外に延びる。東は中室西辺の石組溝SD7623に壊されているが、元来は中室西面の雨落溝に接続していたとみられる。鐘楼の北方でも、伽藍中軸線を挟んでほぼ東西対称の位置で、同様の石組溝SD10990を検出している（後述）。これらは基盤層直上に据え付けられており、創建期に遡る可能性が高い。講堂周辺の排水溝の可能性が考えられる。

玉石敷SX10985 石組溝SD10980の北方で検出した東西方向の石敷。拳大の玉石を敷き詰めており、南面をそろえて長径20~30cmの見切りの石をならべている。幅は1.3m以上で、長さ約19m分を検出した。土坑SK10986と重複し、それより古い。鐘楼の北方でも、伽藍中軸線を挟んでほぼ東西対称の位置で、玉石敷SX10995を検出している（後述）。

玉石敷SX8085 経蔵の西方で検出した南北方向の石敷。拳大の玉石を敷き詰め、東西両側に長径25cm程度の見切りの石をならべている。幅は約2mで、長さ約9m分を検出した。石組溝SD10980を挟んでその北にも延び、玉石敷SX10985に接続する。2001年度の第325次調査において中金堂の東方で検出した玉石敷（『概報Ⅲ』、2002）の北延長部にあたり、総延長は約28mになる。なお第553次調査では、鐘楼の東方で南北方向の見切石をもつ石敷を東西幅約1.2mにわたって確認しており、中金堂と鐘楼の間にも同様の石敷が展開していたものと想定される（桑田訓也ほか「興福寺境内の調査—第553次・



第15図 C区SD10980・SX10985土層図 1:50



第16図 石組溝SD10980 (C区、東から)



第17図 石組溝SD7623と南北溝SD10981 (C区、北から)

第559次』『奈文研紀要2016』)。1975年の調査において、中金堂・講堂と鐘楼との間で検出した石敷も(『防災報告』)、一連の遺構の可能性がある。

土坑SK10986 石組溝SD10980の北で検出した不整形の土坑。東西5.2m以上、南北1.4m以上、深さ約25cm。鎌倉時代の土器がまとめて出土した。玉石敷SX10985と重複し、それより新しい。

南北溝SD10981 C区南半、石組溝SD7623の底で長さ7.7m分を検出した。幅30cm以上、深さ約10cm。西肩に拳大の石を据えて側石とする。底石は確認していない(第17図)。古代における中室の西雨落溝の可能性がある。

(4) 鐘楼(D・E区)の遺構

鐘楼SB11010 礎石は、西北隅の1基を確認した。長径約1.3mの安山岩で、柱座などの造り出しあはない。東南隅では、想定位置で礎石やその据付穴・抜取穴を確認できず、削平されたとみられる。地表には他に8基の礎石が露出しており、その測量成果によると、鐘楼は桁行3間、梁行2間の南北棟礎石建物で、桁行は全長約10.0m(34尺)。柱間寸法は中央間が約3.5m(12尺)で両脇間は約3.2m(11尺)。梁行は全長約7.1m(24尺)で、柱間寸法は西が約3.2m(11尺)、東が約3.8m(13尺)となる。梁行が等間にならない点についての解釈は後述する。

基壇 西北隅(D区)と東南隅(E区)を確認した。基壇の規模は、東西約10.9m(37尺)、南北約14.5m(49尺)。基壇の出は、北面と西面が約2.2m(7.5尺)、東面と南面は不明である。基壇は大きく削平を受けており、現存の土壇には近代以降の造成土が35~50cmと厚く盛られていた。現存する基壇の高さは、西北部で35~40cm、東南部で約30cmである。基壇は黄褐色砂礫土の基盤層を削り出して造られており、西北部では裾の一部でぶい黄褐色粘質土の積土を確認した。

基壇外装は、一部で凝灰岩製の羽目石を確認した。経蔵の外装と同様、地覆石はなく直接羽目石を立てている。

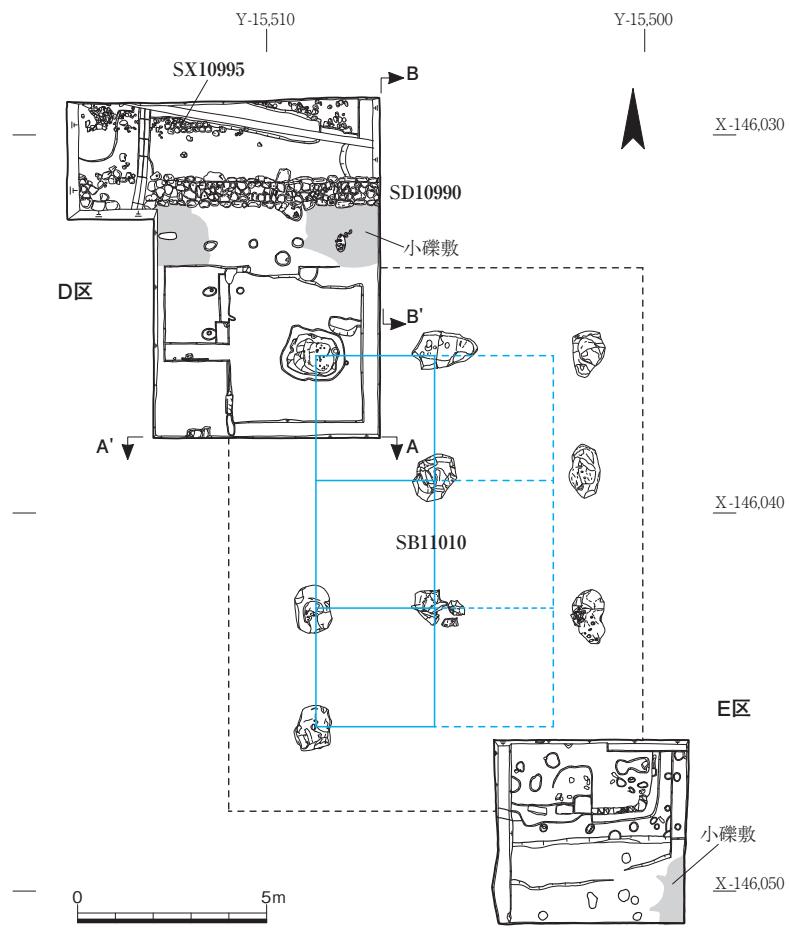
このほか、基壇の周囲で、建設時もしくは解体時の足場穴とみられる小穴列が見つかっている。小穴は平面が径20~40cmの円形を呈する。上層焼土の上から掘り込まれるが、詳しい時期は不明である。また、基壇の北面および南東では、基盤層の直上で小礫敷を確認した。基盤層に含まれる礫を利用しつつ、さらに径1~3cmの礫を人為的に敷いているとみられる。創建期に遡る遺構の可能性がある。D区東壁の土層断面の観察結果によると、小礫敷の直上を下層焼土が覆う。

石組溝SD10990 鐘楼の北方で検出した東西方向の石組溝。側石と底石に長径30cm程度の玉石を用いている。幅約50cm、深さ約10cmで、長さ約8m分を検出した。東西はさらに調査区外に延びる。底石上面の標高は、西に向かって低くなる。経蔵の北方で検出した石組溝SD10980と、伽藍中軸線を挟んで東西対称の位置にある。

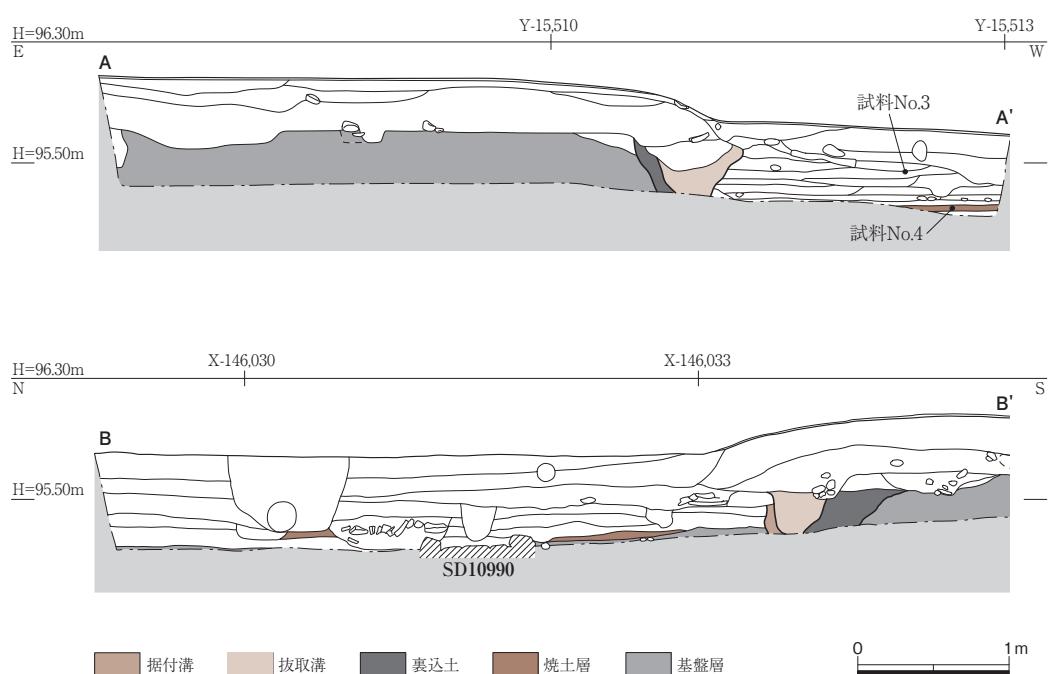
玉石敷SX10995 石組溝SD10990の北方で検出した石敷。拳大の玉石を敷き詰めている。幅1.3m以上、長さ約5.5m分を検出した。経蔵の北方で検出した玉石敷SX10985と、伽藍中軸線を挟んで東西対称の位置にある。

(桑田)

第18図 鐘楼東南部(E区)全景(南西から)



第19図 鐘楼調査区（D・E区）遺構平面図 1：200



第20図 鐘楼調査区（D区）土層図 1：50